

AI（人工知能）を包含する Embedded Knowledge（埋め込み知）と言う視点

本学会副理事長 山崎秀夫

第 10 回 人工知と埋め込み知

新しい産業革命が始まったという認識が国連経済社会理事会認定の国際機関であるスイスのダボス会議（世界経済会議）を契機として世界中に広まり始めて以来、AI が大量の知識を作り出したと言う認識（人工知）もまた、広まっています。例えば ISO30401 によりナレッジ・マネジメントの国際標準を作り上げたイスラエルの KM 学会も人工知を知識として認識しています。筆者は先日行われた KMGN（世界 11 か国による KM の連合会議）において ISO30401 制作のリーダーであるイスラエルのモリア・レビー博士により「AI による人工知が大量に生まれている現在、日本の学会はそれをどう考えるのか？」「特に S E C I モデル学派はどう見ているのか？」と詰問され、たじたじとなりました。また筆者も参加したインドの KM 学会の大会では「見えない KM」と言う提案もなされ、「人工知能が様々な質問に答えるナレッジシェアリング」も構想されています。

では日本では人工知をどう見ているのでしょうか？ 弊学会の西原立教大学准教授は、AI が作成する知識に対して人工知と言う用語を提案しています。西原准教授の定義によれば DIKW モデルと S E C I モデルを共に用いて人工知を説明しています。それに基づけば「AI は大量の有益な情報を生み出す。そしてその多くは人に知識と認められて知識となっている。」「AI が作り出し、人に知識と認められた人工知は、連結化によって花開く」と言う説明のようです。従来のギリシャ哲学における「Justified True Brief」に基づく「人だけが知識を生成する」と言う従来の発想と人工知の折り合いを上手くつけています。要約すれば AI は DIKW モデルによって有用な情報を大量に生み出し、人がそれを知識として認識する、これが人工知＝形式知と言う説明です。

筆者の場合には、人工知には形式知と言うとらえ方もあると思いますが、同時に Embedded Knowledge（埋め込み知）と言う視点もあると考えています。例えば RPA（ロボティック・プロセス・オートメーション）は、ホワイトカラーのパタン化された業務を動画に撮り、それからアルゴリズム（数学の一種）を自動定義し、プログラム（アルゴリズムと言う数学の塊）を自動生成します。そして RPA はビジネスプロセスに埋め込まれて稼働します。すなわち知識がビジネスプロセスに埋め込まれており、暗黙知の認知的側面を置き換えるサービスとして働いているとみることができます。

驚いたことに日本 KM 学会のベテラン理事の中にも AI（人工知）や Embedded Knowledge（埋め込み知）を全く理解していない、ないしは初耳であると言う方々が少なからずいらっしゃいます。日本 KM 学会は古い組織や理論に固執する保守的な組織であるわけにはいきません。もし日本 KM 学会が組織面からも理論的にも保守的な姿勢を取り続けるならば、

KMGN はおろか、新しい産業革命に乗り遅れが目立つ日本の産業社会からも見捨てられることになるでしょう。人工知や Embedded Knowledge（埋め込み知）の基本をしっかりと理解しましょう。

以上